外村　繁「夢幻泡影」について

The Reflections On "Mugen Hōei" written by Shigeru Tonomura

中野恵海

はしがき

筆者は以前（昭・三九・六）この研究論集に拙稿「外村　繁論―作品とその信仰―」を発表した。その後気付いた事やら何やらが出て来ているので今回その作品「夢幻泡影」に限ってそれらを纏めてみることにした。叙述は出来るだけ前稿との重複は避けたが、やむを得なかったところもある。

「夢幻泡影」は昭和二十四年（外村四十八才）「文芸春秋」に発表された作品で、これは前年、彼の愛妻とく子が脳軟化症で倒れ、ついに起たず、約十ケ月病んだ上、十二月十三日永眠した。享年四十六才であった。その妻の死を作品化したものであり、この痛烈な体験が又彼の信仰に大きく作用したと考えられる。そのような点を中心に述べてみたい。

1　題名の意味

「夢幻泡影」という題名は、滝井孝作の「無限抱擁」を大いに意識して付けられたものと考えられる。年譜及び彼の随筆やその作品によれば、彼は大正十三年四月に東大（経済学部経済科）に入学したが、六月には麻布六本木カフェー「マスヤ」の女給、八木とく子を知った。一見して「妻がそこにいる」と感じたそうで、翌年九月よりこのとく子と事実上の結婚生活にはいったのである。この時、彼女との問題に苦しみながら滝井の「無限抱擁」を読んだのである。外村はこの「夢幻泡影」の中でも、こう述べている。

――私は「無限抱擁」から文学の養分を汲み取ると同時に、何より生きる自信を與へられたとも言ひ得よう。生来頑な（かたくな）私の、妻への愛

「夢幻泡影」について

情が私は私なりに、こんなにも精一杯に開花出来たといふのも、その自信の故ではなかつたらうか。――

この感激から外村は、文学開眼のようなものを得、以後、ひそかに滝井を心の師と定めて変ることがなかったのである。

「無限抱擁」はその最初の稿「竹内信一」が大正十年に発表されてから足かけ四年にわたって書かれた連作体の小説で外村が読んだのはその発表されたばかりのもので、昭和二年、改造社から単行本として刊行されるに先立つものである。この作品は川端康成のいう「稀有な恋愛小説」であって近代小説中の愛情の教典と仰がれている。「無限抱擁」は作者の俳句の修行によって得た的確な観察と透徹した写生の目につらぬかれているが、又男女愛情の無限なることを信じこれを謳歌する作品であり、ここにそのモチーフなり主題なりが存する訳で、題意はまさに「愛情の讃歌」といえよう。「夢幻泡影」の方は、これを「むげんほうえい、或はむげんほうよう」と読むわけで、滝井の「無限抱擁」と読みを同じくし、ただ漢字をのみ変えたものとも思える。この方の字義は、広辞苑には、ゆめとまぼろしとあわとかげと、人生のはかないたとえ、とあり、冨山房の「漢和字典」には無いようで有り、有るようで捕捉し難いことのたとえにいう。などとあるが、外村の場合は無論、諸行無常という仏教人生観から出ている訳で、愛の無常性を意味することになる。滝井の「愛の讃歌」なるに対し、これは「愛の挽歌」でもあろうかと私は思うのであるが、讃歌も挽歌も共に「愛」なるものを人生至宝のものとしこれを限りなく愛惜、思慕することに於ては同じである。

「死がどうして恐ろしいか。死ぬことがどうして嫌やか」外村は自らに問うたという。

そしてそれは「愛する者と別れなければならなくなるからだ」と思ったという。仏教の「愛別離苦」を外村は最優先させたわけである。「夢幻泡影」を単に、人生のはかないことという風に表面的に見てはならない事を私は述べているつもりである。仏教的世界観に立っての無常観、その人生観というものをここで論じなければならぬようであるが、次の場にそれはゆずりたい。

2　「妻の枕許に腕組んで」について

作品の第一章の終りに次の様な文章がある。

――私は、思はず立ち上り、隣室の妻の所へ行ってみた。妻は相変らず眠ってゐる。私は妻の枕許に跼み、暫く腕組んで、その様子を眺めてゐた。

それから第二章の初めの方にもこうある。

――私は妻の枕許に腕組んだまま坐ってゐる。「とく、とくよ。」思はず、妻の名を呼んでみる。

そして同じ第二章の中程のところに

――私は妻の枕許に腕に組んで、坐り込んでしまった。いかにも腕を拱く、とはこのことと思われた。

以上三例であるが、ともに「妻の枕許に腕組んで坐る」という文句がつかわれている。言う迄もなく、私小説作家というものは作品中の

文章には特別神経をつかうものである。又そうでなければ私小説というものは成り立たない。この短かい分量の文章中に三個処も同じような表現の文句を不用意に使うだろうか。私にはそれは絶体にないだろうと思われる。これ等の文言は悉く意図的である。意識的に或ることを強調しているのだ。或ることとは何か。私はそれは「無力感」だと思う。腕というもの、人間の手というものは、動き働くところに、その特別な意味や特徴がある。「打つ手がない」「手を出さない」「手のかかる子」など身体の他の部分に見られぬ程多くの意味の転用があり、その事を思わせる。手を組んでいるのでは話にならぬ。手を拱くとはどうしようもない、なんとも出来ない、絶望の姿であり、無力感にうたれた姿にほかならない。妻とく子は倒れて十ケ月、「痛い、痛い、痛いよう。」と言いつづけ、没後もその声が耳についていたという。そしてその「神経痛は脳軟化症同様心臓弁膜症に因るもので、治療の方法はない」という事であり、左手は利かず足はむろん動けなかった妻を目の前にして、愛別離苦を第一とする外村の心はどうであったろうか。われは無力なり、との思いが胸一杯であったろうと思われる。

妻の死後、外村の机の上に「歎異抄」が置かれていたという。その「歎異抄」の第四章に次の文章がある。

——今生に、いかに、いとをし、不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲、始終なし。

この慈悲始終なし、とはこの人間的愛情は終始一貫しない。徹底しないという意味であり、つまり人間の愛情には限界がある、というのである。無限をねがう人間の思いをよそに、現実の姿をはっきり見定めたこれは親鸞の言葉である。外村は滋賀県の信心深い家庭に育ち、朝夕の勤行には母と共に「正信偈」を誦じたという。後年、（大正十年）倉田百三の「出家とその弟子」に感動したが、殊にその扉に「極重悪人唯称仏。我亦在彼摂取中」というその一句があったので感銘深く、後日「歎異抄」に傾倒する機縁となったのであった。然し彼にとって「歎異抄」は難解以上のものであったらしく。「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪をや」など、悪人が堂々と極楽往生出来るなど、若い彼の正義感から許さるべくもなく、「この慈悲始終なし」と人間の愛情に限界があるなど、まるで「脳細胞をさかなでされるような気がした」と彼は述懐している。その彼が今、病に苦しむ妻を目の前にして徹頭徹尾無力そのものである自己を見出した時、「この慈悲始終なし」の文言を了解したのである。一つが解れば「つまりものが取れたがように」歎異抄のすべてが了解される。「善人なをもて往生をとぐ……」いかにもその通りである。親鸞の申されたことに間違いはなかったのだと彼は浄土真宗という宗教に帰依し、動揺する事はなかったのである。

世に謂う入信に三つの要素があると。一は無常感、二は無力感、三は罪悪感であると。外村の場合は即ち、二の無力感であろうか。前述の「妻の枕許に腕を組む」という表現は己の無力さ、わが身の微少さを痛感したところから発するもので彼が親鸞の教えにみちびかれた契機を物語るものである。

3　「哀れだった」の意味

この作の第三章の終りから第四章の初めにかけて、次のような文章がある。

①――私はこの母の老先を見護るべき妻の、先立つて行つた不孝を、妻に代つて母に詫びた。そんな日本の妻といふものが哀れだつた。それにひきつづいて次の文章がある。

②――「どうして、こんなに大勢の子供達をこんなに立派に育ててくれたのですもん。主婦の務は十分つくしてくれられたのです。よい人でした。」母は健気（けなげ）な面持で、さう言つた。そんな母の姿も哀れだつた。

それから第四章の初め、

③――さう言へば、鏡といふものは冷いものだ。どんなものの影も映すけれど、どんなものの影も止めはしない。そんなものを、昔の母は娘に遺したといふ。哀れだつた。

この①②③の文章中に使われたそれぞれの「哀れ」の意味を考えようとするのであるが、まず①の場合は、家族制度の中における嫁というものの立場に対する感懐である。嫁なるものは自分が死んでゆく場合でも、姑に対して済みません、と、つまり老先を見護らねばならぬ身が、見ることもしないで死んでゆく事を詫びなければならない、というこの日本の妻なるものの姿が「哀れだった」というのである。この「哀れ」は、泌々と限りなくいぢらしく、いとしいという思いであろう。表面的に浅く「可哀想だった」ではすまされまい。②の場合も、若い者に先立たれて、がっくり来た老母が自分のショックを堪（こら）えて、妻を失った息子の心を思って、嫁の人柄を称（たた）え、息子を慰めようとする、その日本の母も健気で立派でそしてまた限りなくいとおしかったというのであろう。この母というものも嘗ては嫁であった事はむろんで、作者にはここで日本の女というものを思っている事でもあろう。③の場合はどうか。ここでは鏡なるものについて述べられている。鏡というものは不思議なもので、そこに深紅のバラが映ろうと、たとえ燃えさかる炎であってもそこに映った色は冷たく感じられる。それは鏡が元来鉄のような金属とか、ガラスと云ったヒヤリとしたもので造られているという事にも因るであろうが、何よりも、そこに映ったものは映像であり、実体ではないという事によるであろう。その鏡はどんなものの影も一切こばまない。そして去るものは追わず、これまたとどめる事もない。この事は一つの人生態度を示すものである。つまりそれは、われを取り巻く環境を決して逃避せずに対決し堪えるということ、そして我意をつのらせて去る者を追わないという事ではなかろうか。このような辛い、苦しい、そして厳しい生き方を象徴する鏡を昔の日本の母は娘に形見としてあたえたという。この厳しいものを「貴女も母のように生きなさい」と娘に遺していった母なるものに、これまた泌々と心の底からいとしまずにはおれぬ心が「哀れだった」の表現ではなかろうか。そして又私は、この鏡に象徴される人生態度に浄土真宗の宗教的実践を想起するものである。どんなものの影も映す、そしてどんなものの影も止めないというのは、おめず憶

せず、うろたえず、あるがままの現実をうけとってゆこうとする心、そして人間愛情の限界を知って徒らに我欲をつのらさず大いなるものに委してゆこうという心である。この素直な心が親鸞の教える浄土真宗の心である。

仏教人生観に立って人間の「愛」に接する時、そこに無限に湧き出でる感情、それがこの場合の「哀れ」というものである。この哀れをモチーフにするのが外村文学であろうと私は思っている。「夢幻泡影」にはこの哀れが全篇にみなぎっている。そういう意味のこれは「挽歌」である。

4　この作の主題

この作の結末は全篇の白眉であると絶讃されている。妻の死後の或る晩、呆けた様な毎日を送るこの夫は、遺された三人の子と、二十の扉という遊びに興じる。亡き妻、或は亡き妻の遺骨を当てさせる訳であるが、答えの推測のついた長男が「父さんの最愛の動物でしたか」ときめつけ、「若しも中風でなかったら、足で背中掻けると、言ひましたか」「始終、ぼろぼろの財布持って、お使いに走って行きましたか」「よいとまけみたいな、襦袢着てゐましたか」口々に言っては、わっという笑声である。最早この現実に無力な存在となってしまったような、壷中数片の骨にすぎない妻を憶い、この夫は子供達の笑声と共にあはあはと笑い声を立てながら、何とも知れぬ涙の浮かぶのをどうする事も出来なかったという結末である。ここに溢れる人間的感動は誠に素朴そのものであって多くの説明は不要であろう。一家団らんの中で子供達が口々に言う亡母の印象は具体的で鮮明である。足で背中を掻くと言い、ぼろぼろの財布と言い、よいとまけみたいな襦袢と言う。何という暖たかさであろう、悪口めいて少しの嫌味もかげもなく言いたい丈のことを無遠慮にわめき散らしてはばからぬ中に母に対する限りないこの子等の慕情と甘えがある。亡き母を中心に描かれたこの団らんの中に強く結ばれた太い愛情の絆が感じられる。

前述に於て、私はこの作品のモチーフとしての「無力感」に言及した。無力感にぶちのめされた作者が「この慈悲始終なし」の親鸞の言葉に目覚めて入信したとは彼自身の告白である。無力なる人間、それを仏教では凡夫と言う。この作品は又、実にこの凡夫を描いているものであると私は思う。何よりも凡夫である事を自覚する。そして凡夫である事に生きる。そこによろこびと幸福を感じる。凡夫の往生を徹底して説くところに親鸞の教えの面目がある。この世は正に釈尊の説く夢幻泡影に間違いはないながら、それ故に又限りなく人間の「愛」こそは慕わしく、尊く、いとほしい。これがこの作の主題である。